グローバル社会に先駆けてアジアに注目し、世界で共働できる若者たちを育ててきた70年

武蔵野 History

武蔵野にまつわる歴史を楽しみながら学ぶ

亜細亜大学は、その名のとおり、アジア地域の人々との交流を通じてともに繁栄していくことを目指して誕生しました。現在、中国や東南アジアの国々は世界経済においても重要な存在となりましたが、同大学がアジアに目を向けたのは戦前のことでした。武蔵野市に世界から若者たちを迎えている亜細亜大学の歩みを辿っていきましょう。

アジアとともに繁栄するために 自立した人間を育てる大学を設立

亜細亜大学のルーツである「青々寮（せいせいりょう）」の誕生は、昭和14（1939）年にさかのぼります。現在の世田谷区豪徳寺に設立されたこの私塾で、学生たちは寝食をともにしながら学んでいました。設立に携わった藤原繁（ふじわらしげる）（後の亜細亜大学学監）は、その教育の理念について「アジアの人々とともに働き、アジアの興隆に寄与する人材を養成しなければならないと思った」と述べています。時代は、昭和9（1934）年に満州国が成立し、12（1937）年には日中戦争が勃発し、国際的な緊張感が高まっていた時期でした。

昭和16（1941）年、現在の亜細亜大学のある土地（境5丁目）に「興亜専門学校」が設立されました。本科と専修科から成り、本科には「満蒙支科」「南洋科」「内地科」が設けられました。同年12月8日、太平洋戦争が開戦。アジアを専門に学ぶ同校の学生たちは、インドネシアのボルネオ島や蒙古（モンゴル）などへ派遣学生として送られます。学徒動員も始まり、終戦までに97名の同窓生が戦死するなど、つらい時代もくぐってきました。

戦後、興亜専門学校は、「日本経済専門学校」を経て、昭和25（1950）年に「日本経済短期大学」となりました。この短期大学がアジアとの架け橋となる転機が訪れたのは、昭和28（1953）年のことでした。当時、日本に留学する予定だった香港華僑（かきょう）の若者、96名が受け入れ先を失い、国際問題になりかけていたのです。日本経済短期大学は建学の理念に立ち返り、留学生たちの受け入れを決定。同年12月には中国留学生部が開設され、翌年（1954年）1月に香港の学生たちを無事、受け

入れました。

この年、日本経済短期大学を経営する学校法人は、名称を「亜細亜学園」に改称するとともに、翌年に「亜細亜大学」を設立することを決めます。新理事長には太田耕造が就任。太田は終戦時の鈴木貫太郎内閣で文部大臣を務めた人物です。昭和30（1955）年に開学した亜細亜大学の初代学長に就任した太田は建学の精神として「自助協力」を掲げました。この言葉には「自分を助けるのは自分しかいない。自立した人間こそ本当の協力関係が築ける」という意味が込められています。

太田には力強い協力者も現れました。東急電鉄社長の五島慶太です。五島は、「教育は太田先生にお任せした。経営は私が引き受けた」と言って、建設が頓挫していた本館を完成させるなど、学校の経営に乗り出しました。昭和34（1959）年の五島慶太の死後も息子である五島昇が理事長を受け継ぎました。

昭和32年に完成した本館（元4号館）

斬新な制度を創設しながら世界で共働できる人材を育成

昭和51（1976）年に経済学部に国際関係学科を開設し、諸外国との交流で活躍する人材育成に務めてきた亜細亜大学ですが、衞藤瀋吉が学長に就任してから改革に拍車がかかります。平成元（1989）年、国際関係学科で約半年間の留学制度が始まり、他学部の学生も加わり、初年度だけでも米国の州立西ワシントン大学を中心に4大学で559人が学びました。

同年には「フレッシュマン・イングリッシュ」を開始。英語を母国語とする23名のネイティブ教員を採用し、週に5回の会話を中心とした授業を始めました。その後も、特技を自己PRする「一芸一能推薦入試」や大学入試センター試験を利用した入試制度を導入するなど、斬新な制度を創設してきました。

亜細亜大学は興亜専門学校時代から、現在と変わらぬ場所で教育を続け、地域に開かれた大学を目指してきました。平成元年から市民の聴講生の受け入れ、武蔵野地域学長懇談会へも参加しています。現在では、学内に地域交流課が設けられ、地域でまちづくりを行う市民が授業を行ったり、学生たちが市内の小・中学校でスポーツや教育の支援するなど、地域との幅広い交流を行っています。

平成24（2012）年には新しい学科として、多文化コミュニケーション学科も誕生しました。この学科の目的は、世界の人々と共働でき、かつ、国境を越えてコミュニケーションできる力を学生たちに身に付けてもらうことです。第二次世界大戦の直前に掲げた「アジアの人々とともに働き、アジアの興隆に寄与する人材を養成する」という理念は、今も亜細亜大学の教育に息づいているのです。

むさしの今昔物語 ～亜細亜大学の巻～

亜細亜大学では、前身の興亜専門学校時代からアジア地域をはじめとする諸外国との交流を行ってきました。校舎のある武蔵野市にも数多くの若者たちが訪れ、生活してきました。

昔　留学生歓迎用タワー

昭和29年に香港から留学生を受け入れたときに武蔵境駅北口に設置された歓迎のタワー。留学生たちは横浜港に到着し、初めて見る雪のなか、武蔵野市に到着しました。

今　留学生会

現在、亜細亜大学では、中国をはじめ世界各国から500名以上の留学生が学んでいます。学内では留学生会が組織されるとともに、さまざまな国際交流の催しが行われています。